
幸せの航路

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの航路

【著者名】

白波

【Zコード】

N7187V

【あらすじ】

カントーやジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュュといった主要な地方から遠く離れたセイリュウ地方。悲しい過去を持つ少女アキは父にもらった船に乗つて旅立つ。しかし、それと同時に止まつていた運命の針が動き出す。

プロローグ

ポケットモンスター

縮めてポケモン

この世の不思議な不思議な生き物

あるものは山に、空に、大地に、町に、またあるものは海に生息している

その数は確認されているだけでも600種

しかし、ポケモンの正確な数を知る者はいない

人間とポケモンは、古くより友として、頼れるパートナーとして深くかかわってきた

ポケモンの数だけ出会いがあり、その数だけの別れがある

すなわち旅に出るとこことはたくさんのポケモンや人と出会いつことである

そんな出会いと別れの旅が今日もどこかで始まるとしていた

ここはカントーやジョウト、ホウエン、シンオウ、イチシユといった主要な地方から遠く離れたセイリュウ地方。セイリュウ地方はたくさんの島で構成されており、移動手段は主に船。その交通の便の悪さからほかの地方との交流はほとんどない。

セイリュウ地方のオイカワタウンに住む少女アキは、いつも通り父親と一緒に船を見送っていた。父親と言つても、直接の血のつながりはない。両親を亡くし行き場をなくしていたところを拾われたのだ。それ以来この父親と毎日港に出入りする船を見る毎日だ。ちなみに父は今は引退しているが元は凄腕の船乗りだつたらしく、港に来るほとんどの船の船乗りが父の事を知っている。

そして、明日はアキの旅立ちの日である。父から一通り船の操縦を学び、明日の昼、父にもらった船と、父に拾われる前一緒にいたドーブルとともに旅立つのだ！

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからよろしくお願いします。

第1話 海風とじま

今日はアキが旅立つ日である。一通り船の乗り方を学んでいたアキは父にもらった小さな手漕ぎの船に乗った船に乗り込んだ。

「それじゃあ、お父さん、行つてくるね…そして、2年間ありがとう…」

「ああ！がんばれよ！お前のうちほこの島にあるんだから、さびしくなつたら帰つてこよーあと、やつかも言つたがその船は島と島の間を渡ることには問題なこが、海が荒れているとときは乗るなよー。その小さい船じゅう流されちまうからなー」

「はい…」

「たまには連絡よこせよー一体には気を付けてなー」

「わかつてゐるわ…そろそろ行くね…」

と言つと私は船を動かした。

船を漕いで行くとすぐそこには島が見えた。セイリュウ地方は島々を結ぶ定期便がないため、他の島へ行くときはなみのりが使えるポケモンを使うか自分の船を使うかの一択しかない。

海へ漕ぎ出してみるといつも港で感じている海風が、また、違つたものに感じてくる。セイリュウ地方はトキウミ神殿の付近など一部の地域を除いて波がとても静かで、その上、嵐など海が荒れることはめつたにない。そのため、たとえ手漕ぎの船でもそんなに苦労することもない。

少し船を走らすと少し向こうに島影が見えてきた。父が海流の流れなど船で旅するうえで気を付けなければならないことが事細かに記された地図を見ると、おそらく、あの島は、オイカワタウンがあるオイカワ島の隣に位置するウメ島だ。アキは隣にいたドーブルに

「ドーブル…見えてきたね…もつすぐだよ…。」

と話しかけるとドーブルはアキの方を向きづなずいた。

「ドーブル…この先どんなことが待ってるんでしょうね…。」

と表情には出さないながらもアキは珍しく興奮していた。

おそらく、今の、父親と出会つてセイリュウ地方に来てから初めて別の島に行くからであろう。父が言つにはセイリュウ地方は他の地方はおろかセイリュウ地方の島同じであつてもほとんど交流がない。そのため、各島ごとに独特の文化を形成しており、他の地方の人々が、この地方を発見してこの地方との交流を望んだ時も応じたのはイースゲート島と呼ばれる島の人のみで、その島はこの地方で唯一定期便が来る島として有名である。もともとジョウト地方に住んでいて町同士の行き来が盛んであることが当たり前だったアキにはそれが不思議でしょがなかつたのだが…。

船をいくら漕いでもなかなか島影に近づかなかつた。手漕ぎの船と言つのは体力を消費する割になかなか進まない。どうせなら父の厚意に甘えなみのりが使えるポケモンをもらつておけばよかつたと今更ながら思つた。

（はあ…いつになつたら着くのかしら…。）
と思ひながらアキは船を進めるのだった。

続く

第一話 海風といせ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第2話 ウメ島上陸

「はあ…疲れたな…。」

アキは手を休めそうつぶやいた。無理もない、オイカワ島を出てからもう半日になるのだ。島影はかなり近づいてきたが周りはだんだん暗くなっている。後を振りかえると真っ赤な夕日が遠くにあらオイカワ島を照らしている。

「夕日を見ていると思い出しちゃうな…あの日の事…ねえ、ドーブル…。」

と横にいるドーブルに話しかけたが、ドーブルは、その呼びかけに答えることなく赤い夕陽を見つめている。

「もうひと踏ん張りだから、がんばろつか…。」

と言つとアキはふたたび船を進めた。

それから10分は経過しただろうか…アキは何とか日がかなり沈み暗くなり始めた、ウメ島の港に着いた。

「とりあえず、どこか宿を探そうか…。」

とドーブルに言つとアキは港の人に停泊の許可をもらい船を岸壁に結び付け宿屋を探した。

そもそも、ポケモンバトルを行う文化がないセイリュウ地方には、ほかの地方との交流があるイースゲート島ですらポケモンセンターが存在しない。さらにモンスター・ボールもほとんど普及していないため、当初モンスター・ボールにドーブルを入れて毎日のよつにバトルの特訓をしてたアキは不思議がられたものだ。

ちなみにセイリュウ地方ではセイリュウ宿屋協会に加盟している宿なら無料で宿泊でき、だいたいどの島にも一か所はあるらしい。また、こうした宿屋は漁師やアキのような船旅をしている人などが

情報交換する場所でもあり、ポケモンを回復させたりするようなことはできないが、ほかの地方にあるポケモンセンターに近い役割を担っているのだ。

アキは港の近くで宿屋を見つけると中に入った。

「すいません…」

と入口でいると受付にいた女の人が

「ここにちは！こちらは宿屋ウメ島です。」

と言った。受付に行って宿泊に手続きをしたアキは漁師や旅人が集まるロビーに行つてみることにした。

ロビーに入ると思つたより活気にあふれていた。自分の連れているポケモンを自慢するもの、このあたりの海域の天候について情報を交換するもの、自分が行つた様々などいろいろの話をするもの…

アキはいろんな人に話しかけこの周辺の海域についての話は聞けたが、現在、ジョウト地方がどうなっているのかは、さすがにわからなかつた。

アキは、部屋に戻るとベットに寝そべり首にかけていたカバンを開け中に入つている写真を見つめた。

それは、まだ、アキがセイリュウ地方に来る前、あの事件の直前の撮られた唯一の家族写真であった。

「お父さん…お母さん…私、一人で旅ができるぐらいに大きくなつたよ…だから見守つてね…。」

と言つと写真をそばの机に置きアキは静かに寝息を立てた。

第2話 ウメ島上陸（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

説明ばかりで読みにくくすみません…。

これからもよろしくお願いします。

第3話 ウメ島散策

次の日…

朝、目覚めたアキは朝食を食べた後、島を散策してみると元気だった。

アキが食堂へ来ると島で取れた木の実などを使つた朝食が出でた。

「うん…おいしいね…」

と言いながら横にいるドーブルに話しかけるがドーブルは木の実を食べるのに夢中で気づかなかつた。

「相変わらず食いしん坊だね…。」

と言つとアキは

「いただきます…。」

と言つてから朝食を食べ始めた。

朝食を食べ終わるとアキは宿を出て海岸沿いを歩いてみた。この島はあまり多いきくない島なので回るのにはやうに苦労しなかつた。オイカワ島に近いためか少し雰囲気が似ているような気がする。

アキが港の近くに来たとき

「あの…すいません…。」

と女の子に話しかけられた。

「なんでしょうか?」

とアキが聞くとその女の子は

「このへんでイーブイみませんでしたか?」

と聞いた。

「いえ…見てませんけど…。」

とアキが答えた。

「やうですか…私はしばらへるの島にいる予定なので見つけたら連れできてもらえませんか?」

「は…いいですよ…。」

とアキが答えるとその女の子は

「それじゃあお願ひします!」

と言い残し去つて行つた。

(イーブイか…そういえばわたくしの女の子名前なんて言つただろう…。)

そんなことを考えながら歩いていると突然横の藪からイーブイが飛び出してきた。

「あつ!」

とアキが思わず声をあげるとイーブイは立ち止まつてこちらを見つめた。

「イーブイ…こっちにおいで…。」

とアキが話しかけるとイーブイがよつてきた。

「いい子だね…。」

(人懐っこいイーブイだな…あの子が探していたのはこの子かな…。)

と考えアキはイーブイを抱きかかえさつきの女の子を探すことにした。(どに行つたんだろう…あの女の子…。)

そう広くない島なのですが見つかると思つたがなかなか見つからなかつた。

(困つたな…。)

と思いながら港に腰かけていると

「あつ!イーブイ!」

と言ひながらわたくしの女の子が駆け寄つてきた。女の子はイーブイを抱きしめると

「見つけてくれてありがとう。私はポケモンコーディネーターのスマーレーよろしくね!」

と言つた。

「私はアキ…ポケモントレーナーよ…。」

とアキが自己紹介するとスミレは

「ポケモントレーナーって、こうじとせうじの地方の出身じゃないの？」

と聞くとアキは

「ええ…今のはこの隣のオイカワ島にあるけどもともとはジヨウト地方に住んでいたのよ…あなたは？コートライネーターもセイリュウ地方出身者はいないと思うけど…。」

と聞いた。

「私はホウエン地方のトクサネシティ出身なの！」

それからアキとスミレはそれぞれの地方の事やこの地方に来た感想などを話していた。

しかし、アキは話に夢中になりセイリュウ地方ではめったに飛んでいることのないヘリコプターが上空を飛んでいることに気付かなかつた。

第3話 ウメ島散策（後書き）

読んでいただきありがとうございました

これからもよろしくお願いします。

第4話 次の島へ

アキは朝起きたと荷物をまとめて宿を出る準備をした。

「行くよ……ドーブル……」

と言つとアキはカバンをつかみ港へ向かつた。

（なんだかよくわからないけど早くここを離れた方がいい気がする……）

とこつ予感がしたアキのこの手の予感は外れたことがない。

港につき船を預かつてくれていたおじさんに礼を言つて船に乗り込んだ。

「行くわよ……ドーブル……一気に漕ぎ始めるからね……。」

と並つとアキは思いつきました船をこじあだした。

港を出るとアキは船を止め地図を広げた。

「とにかく……ここから一番近いのは……この島の反対側にあるホシ島ね……。」

とつぶやくとアキは島の反対側に向かつて漕ぎ出した。

地図で見る限りホシ島まではオイカワ島へ行くよりも近い。（それでもなんだつたんだろう、あの感じ……まるで……まさか……）とある組織のことを考えたが

（そんなわけないよね……ここはセイリュウ地方なんだから……考えすぎかな……。）

と思い直しふたたび船を進めた。

アキが船をこいでいるとオイカワ島からウメ島へ行くのには半日近くかかつたのにウメ島からホシ島へ行くのは3時間ほどしかからなかつた。

「ドーブル……あれがホシ島だよ……。」

とアキが言つとドーブルは船首の方に身をのしだした。

「ドーブル…あんまり乗り出しちゃだめよ…。」

とアキが注意するとドーブルはバツが悪そうに後ろに下がつた。

ふとアキがウメ島の方を振り返ると一台の黒いヘリコプターがウメ島に降りていいくのが見えた。

「つそ…。」

とアキがつぶやくと

（とにかくここを離れなくちゃ…）

と考え船を勢いよく漕ぎ出した。

そのころウメ島の港では…

一人の女の子が走つてきた。

「…逃がしたか…。」

とその女の子がつぶやくと後ろから追いついてきた女の子よりも年上の部下らしき女性が近づいてきた。

「いかがいたしましょうか?」

とその女性が聞くと女の子は

「ほつておけ! 一日本部に戻る!」

と答えた。

「しかし…」

と女性が言つと女の子は

「私たち先行隊の目的は奴がセイリュウ地方に潜んでいるのか調べるのが目的よ…その目的は達成されたんだから…後は本部に任せましょう!」

と答えた。その時もう一人の女性が走つてきて

「帰りのヘリが到着いたしました!」

と言つと女の子は

「わかつた…行くぞ!」

と言つと部下一人とともに歩き出した。

第4話 次の島へ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第5話 ホシ島で

ウメ島のすぐ隣にあるホシ島は無人島のため人が住んでいない。普通船はこの島を通り越してさらに向こうのハガラ島を目指すのがアキはあえてこの島を選んだ。

アキは最低限の調理器具と調味料は持っていたので木の実さえあれば食べ物には困らないうえに、もしもの時、身を隠しやすいとうのもある。

（さて……あのヘリを見るまでは半信半疑だつたけど、これは少しまずいわね……。）

と考えながら島の中へ木の実と適当な寝床を探しに入った。

寝床については島の奥のウメ島が見渡せるところに洞穴あった。
(ここなら、大丈夫ね……しばらく様子を見て、奴らが動かないようならハガラ島へ行くかウメ島へ戻るかしないと……。)

と思い木の実を探しに行こうとすると突然アミのよつなものが飛んできた。

「もう感づかれたの！」

とアキが声を荒立てていうと

「もう感づかれたの！と聞かれたら」

「答えてあげよう明日のため」

「フューチャー白い未来は悪の色」

「ユニバース黒い世界に正義の鉄槌」

「我らこの地にその名を記す」

「情熱の破壊者 ムサシ」

「暗黒の純情 ゴジロウ」

「無限の知性 ニヤース」

「「「さあ集えロケット団の名のもと」「」」

と一人と一匹のニヤースが名乗った。

「ロケット団？確かに奴らに解散させられたんじゃないの？」

とアキが言うとコジロウが

「確かに我々ロケットはあいつらに潰された……。」

と言いつるとムサシが

「だが、我々ロケット団はひそかに復活し、奴らからカントーおよびジヨウトの支配権を奪還する計画を立てた。」

そのあとふたたびコジロウが

「そこで、奴らの内部事情に詳しいあなたに協力を要請しに来た。」

と言いつとアキは近くに落ちていたアミをつかみ

「そういう割には、荒っぽいことするのね……それに協力するつたつて私は2年前からセイリュウ地方にいるんだから最新の情報は知らないわよ……。」

と言いつとムサシが

「手荒な真似をしたことは謝るわ……でも、たとえ2年前の情報だろうと奴らの実力を見極めるのに必要な材料になる……。」

と答えた。すると、アキは

「この情報知つてどうなつても知らないわよ……。」

と言いつとムサシは

「構わないわ……。」

と答えた。

「わかったわ……ボスの名前は知らないけど、支部長の名前ぐらい憶えているわ……シンオウ南部支部長スズラン、カントー支部長ウメ、ジヨウト支部長ラベンダー。以上よ……もつともウメさんは年だから引退してたかもね……。」

とアキが答えるとムサシが

「協力に感謝するわ……。」

と言いつと三人は去つて行つた。

第5話 ホシ島で（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第6話 出会い

アキがホシ島に来て三日になる。

（動きないわね… そろそろ移動しようかしら…。）
と考えるとアキは荷物をまとめました。

「でも、念のために偵察しないと…。」

とつぶやくとヨルノズクをモンスター・ボールから出して
「ヨルノズク… あっちのウメ島に行つて奴らがいか見てきてく
れる？」

とアキが言つとヨルノズクはウメ島の方へ飛んで行つた。

数分後…

ウメ島の方からヨルノズクが戻つてきた。

「ヨルノズク… あいつらはいた？」

とアキが聞くとヨルノズクは首を横に振つた。

「そう… じゃあハガラ島へ向かうわよ…。」

と言つとアキはヨルノズクをモンスター・ボールの戻し船が止めてあ
るところに向かつた。

アキは船の乗り込むとウメ島の方を向きドープルに
「行くわよ…。」

と言い船を静かにに漕ぎ出した。

ハガラ島へは割と短時間で着いた。

ハガラ島へ着くとさつそくアキは船を港に付けハガラ島を散策す
ることにした。しばらく歩いていると

「返せよ！ それ俺の物だぞ！」

という声が聞こえてきた。ふと茂みの方を覗くと男の子が何人かの
子供に囲まれていた。どうやら中心の男の子が周り子たちに何かを

取られたようだ。

「返してほしけりやこの島の森の奥にあるお宝取つてこよー。」

と言つと周りを囲んでいた男の子たちは去つて行つた。

この島の事は宿である程度調べてある。この島の森のは凶悪なボケモンが多数生息していて近づくのは危険らしい。

「何を取られたのか知らないけど、あきらめればいいのに。」と森の方へ歩き出した男の子を見ながらつぶやくとその男の子が振り返つて

「どこの誰だか知らないけどやる前に諦めるのはどうつかと思つよ。」

と言つた。アキが

「聞こえちゃつたの……。」

と言いながら茂みから出るとその男の子が近づいてきて
「やつてみなきやわからないうだろーお前にだつて大切なものがう
あるだらうーそれを守るためならなんだつてするもんだらー。」

と言つた。アキが

「そんなに大切なものの？」

と聞くとその男の子は

「母さんの形見なんだよ…あの髪留めは…。」

と言つた。するとアキは

「だからつて無理して取り返すことはないんじやない？」

と聞いた。すると男の子は怒つたようだ

「何でそんなこと言えるんだよー大切な取り返さずに逃げるの
かよー！」

と言つた。

「そうよ…私はいつもそうしてきた…昔も、今も…。」

「どうして…たとえ危険でも大切なものを…」

と男の子が言つとアキは

「つるさいわね！だつたらあなたは自分が住んでいた町を襲つた奴
らに立ち向かうの？あの町の人間の唯一の生き残りだからつて追わ
れているのにわざわざ立ち向かつて死ににいくの？」

と珍しく声を荒げて言つた。すると男の子は
「俺だつたら逃げない…たとえ、そいつらがどんな奴らだか」と…。

「

と言い残すと男の子は森の方へ歩いて行つた。

第6話 出会い（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第7話 森の奥で

先ほど男の子と言に争っていたアキは男の子を追いかけ森の方へ向かっていた。

森の入り口で男の子を見つかり

「何でついてきたんだよ。」

と言われた。するとアキは

「あなたの考えがどこまで続くか見に来たのよ…私は一応ジヨウト地方出身でポケモントレーナーだから…ポケモンも持たずそんな森に入るのは危険じゃない？」

と言った。

「わかったよ…ついて来いよ…とにかくせはあんな」と言つてたのにどんな風の吹き回しだ？」

「だから言つたでしょ…あなたの考えがどこまで続くか見に来たつて…私の名前はアキ…あなたは？」

「俺はユウキだ。」

と答えるとユウキは森の中へと歩き出した。

森の中で出てくるポケモンを倒しつつアキとユウキは森の奥へと進んでいった。森の奥の方まで行くと人影が田に入つた。

「立ち止まって様子を見ましょう…。」

とアキが言つとユウキは立ち止まつた。なぜ、アキがユウキを立ち止ませたかと云ふとアキはその人が着ている服に見覚えがあつたからだ。

「なんなんだ…あいつらは…。」

とユウキが言つとアキは

「フラー団…。」

とつぶやいた。

「フラー団?」

「ええ……シンオウ地方の東部に位置するトバリシティを拠点としてシンオウ地方やジョウト地方、カントー地方を中心に活動する組織よ……田的のためなら手段を択ばないわ……。」

「そうなのか……。」

「ええ……とりあえずここは危険だからいつたん離れましょっ……。」

と言つとアキは元来た道を戻ろうとした。すると、そのとき

「待ちなさいよ……せつかく来たのに戻っちゃうの?」

と声をかけられた。

「感づかれちゃったのね……。」

と言つながら草むらから姿を現すと声をかけた女が

「あら……誰かと思つたら久しづびりじやないの……アキ……。」

と言つた。

「ええ……まさか、こんなところに会つとわね……コスモス。」「覚えてくれてるんだ……。」

「忘れるわけないでしょ……3年前私が住んでいた町を襲い、そのあと私がセイリュウに来るまでの1年間私を追い回したあなたを……。」

とアキが言つとコスモスは少し間をおいてから

「特殊先行部隊長から報告を受けていたけど、本当にセイリュウ地方にいるとわね……。」

と言つた。

「2年間見つからぬいぐらいだから、やつぱり意外なのかしら……。」

「その通りね。おしゃべりはこのぐらいにして始めましょうか!」

と言つとコスモスはモンスター ボールを出した。

「ルールぐらい憶えてるわよね……。」

「忘れるわけないでしょ……。」

と言つとアキもモンスター ボールを出した。

「それじゃあ……始めましょうか……審判は貴方お願ひ。」

と言つながら一人の女を指しその人がコスモスの指定したところになると、アキとコスモスはモンスター ボールからポケモンを出した。

第7話 森の奥で（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第8話 アキVSコスモス（前編）

「コスモスはラフレシア、アキはマグマラシを繰り出した。

「バトル開始！」

という審判の合図と共にアキが

「マグマラシ、火炎放射！」

と指示をした。

マグマラシが放つた火炎放射がラフレシアに向かってゆく

「ラフレシアよけて！」

ラフレシアがよける体制に入つたが一歩及ばず攻撃を受けてしまつた。

「ラフレシアに火炎放射は効果抜群…これで相当のダメージを受けたんじゃない？」

と言うアキの言葉に対してコスモスは

「ラフレシア反撃よ！しびれ粉！」

と指示をする。

「マグマラシかわして！」

マグマラシがひらりとかわすと

「ラフレシア連続で眠り粉！」

「マグマラシとにかくかわし続けて！」

ラフレシアが次々と出す眠り粉をのらりくらりとマグマラシがかわし続けるやがて連続で技を使つたのとさつきのダメージからラフレシアに少し疲れの色が見えてきた。

「マグマラシ！今よ！火炎車！」

とアキが指示するとマグマラシは火炎車を繰り出し、ラフレシアに一直線に向かつて行つた。

火炎車はラフレシアに命中し

「ラフレシア先頭不能！」

という審判の声が響いた。

「相変わらずね…。」

と言いながらコスモスはラフレシアをモンスター・バーの戻し次のモンスター・ボールを構えた

「次はこの子よ！」

と言いながらクサイhanaを繰り出した。

「マグマラシ！一気に決めるわよ…火炎車！」

という指示を聞きマグマラシは火炎車を繰り出した。

「クサイhana！よけてから毒の粉！」

マグマラシの火炎車をよけたクサイhanaから放たれた毒の粉はマグマラシに命中した。

「さらに溶解液！」

続けて出された溶解液は毒状態になり苦しんでいるマグマラシに命中した。

その攻撃を受けたマグマラシは倒れてしまった。

「マグマラシ！」

「マグマラシ先頭不能！」

「『苦労さま…マグマラシ…次はこうはいかないわよ…いけ！ヨルノズク！』

と言いながらアキはマグマラシをモンスター・ボールに戻してヨルノズクを繰り出した。

「ヨルノズク先手必勝よ！風起こし！」

ヨルノズクが放った風起こしがクサイhanaに命中した。

「クサイhana！反撃よ！溶解液！」

「ヨルノズク、よけて風起こし！」

クサイhanaが放った溶解液をよけようとしたが一歩及ばず溶解液はヨルノズクに命中した。

「ヨルノズク！」

ヨルノズクが耐えているのを確認すると

「ヨルノズク…もう一度風起こし…」

と指示をした。

ヨルノズクが繰り出した風起こしはクサイhanaに命中した。

「くそ：クサイhana！もう一度溶解液！」

ふたたびクサイhanaから繰り出された溶解液はヨルノズクに命中して

「ヨルノズク戦闘不能！」

という審判の声が響いた。

「ヨルノズクご苦労様：次は…」

と言いながらアキはヨルノズクを戻しモンスターボールを構えた。

第8話 アキバSバズモス（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7187v/>

幸せの航路

2011年10月9日07時40分発行